



平成 28 年 11 月 30 日 かさはら医院にて

## 笠原 吉孝さん

(医療法人かさはら医院 院長)

福岡県出身。京都大学の医学部を卒業。その後、岐阜市民病院、小倉記念病院での経験を経て、再度京都大学病院に一年間戻った後に、ドイツのケルン大学にて、子どもの整形外科を学ばれています。また、日本で読んだ論文の著者がイギリスに居たことから、その人の下で学ぶためイギリスへも渡られました。昭和五五年に帰国され、滋賀整肢園に赴任。その後、後述の理由で滋賀整肢園を閉じる決断をされ、新たに小児医療センターの立ち上げにご尽力されました。平成二七年度までの(五年三ヶ月間)滋賀県医師会々長を歴任され、現在も守山にて開業医として、ご活動なされています。

## 挑戦してみる価値はあるかな

笠原 さて今日は何を話したらいいですかね。

齋藤 まず、はじめに先生がそもそもお医者さんになろうと思われたきっかけからお聞かせください。

笠原 高校の頃は医者にはならないでおこうと考えた。親父が内科医をやっていたから、それには何か、抵抗する方法はないかと。それで医療の他に人生で自分は何ができるのかと思った時に、『蛍雪時代』という雑誌に、何学部が卒業後どういうことをやってとかが書いてあって、それを見て他を探した。ちょうど姉が東京大学法学部出身の新日鉄の社員と結婚して東京に居て、時々その姉の所へ遊びに行っていて、東大出てもらうに朝飯も食べられず、会社のために飛び出していく生活を見て、私には駄目だと感じた。色々選択肢を消していったら、医師は怠けてなれるものではないのだと分かり、一度挑戦してみる価値はあるかなと思った。大抵の思春期ってのは、親には抵抗してみたいっていうのかね。

齋藤 確かにそうですね。親の敷いたレールに乗りたくないっていうのは。それで、医者という職業に就かれて、海外に渡られたご経験もあると思うのですが、そのきっかけや、行った時に印象に残ったお話を聞かせください。

笠原 医学部に入ってから、半分勉強して半分遊んだというか。社会での勉強にも重きをおいていた。その中で、ある時、解剖の岡本教授の授業に出た。その先生が「君たち、この大学に入って、開業して金儲けしようなんて思っているやつは、おらんだろうな」と急に言われた。「君たちは、そういうためにこの大学に入ってきたんじゃないのだ。この日本の医療、世界の医療をどうするか。将来のことを考えていくのが君らの責務だ」と。全然解剖と関係ない話だった。だけど、責任は重大だと思ったのが、印象に残ってるね。私の大きな転機だった。

大学を無事に卒業して国家試験を受ける前に、一年間インターンっていうのがあったが、その当時の制度は、指導を受けるというよりもほとんど無償労働者だった。そこで、インターンボイコット運動が起点となり、卒業後半年で、京大から、学園封鎖・大学紛争等が全国で始まった。色々と紆余曲折あってから、岐阜市民病院に赴任した二年後に、親父が診療中に心筋梗塞で六〇歳で亡くなった。その時に、自分も信頼される医者になるためには修行が必要だと思っただけど、さてと考えた時、これまでの研修の道は大学紛争で自ら閉ざしていた。何とか方策を考えていた時、その岐阜の病院にちょうどドイツから戻ってきた先生が部長ということもあって、世界の医療を見るのも一つの手だと。岐

阜市民病院に三年、小倉記念病院に一年、それから大学病院に一年居てからドイツのケルン大学に行く覚悟をした。日本では大人の整形外科、脊椎外科をやっていた。しかし、ドイツのケルン大学の教授の専門分野は、子どもの整形外科だった。そこで、自分の役割として、日本では分化していない子どもの整形外科を専門的にやろうと思った。ドイツだけではこの極みも不十分なので、イギリスにも渡った。特に、イギリスでは、脊椎外科を学ぶことにした。それで、子どもの整形外科を自分なりに完成したいと、歴史的实践がある病院で学んだ。

### 本当の子どもたちの幸せを考えて

齋藤 海外でのご経験を経て、滋賀県にいらっしゃって、子ども医療と、福祉とも関わられるようになられたわけですが、福祉と医療の連携みたいな観点で、日本と、イギリスとかドイツとの違いを感じたところはありましたでしょうか？

笠原 何にもありません。滋賀に来るまでは、医療ということだけしか考えてなかった。私は整形外科医ですから、ドイツでも肢体不自由施設での当直もあったけど、ドイツ人医師が代わってくれたので、私は参加しなかった。イギ

リスにいた時も、最先端の医療をどう身に付けるか、ということしか考えてなかった。日本に帰ろうと考えていた頃に、大学の教授から連絡があつて「戻ってから何がしたいか」と尋ねられた。そこで、私から条件を三つ出した。一つは、ケルン大学で講師まで経験したので、大学には帰りにたくない。次は、子どもの整形外科をやりたい。最後に、小倉記念病院が良いと思うと書いた。教授からは「滋賀県がその専門医師を探しているから」と言われて、当時の肢体不自由児施設だった滋賀整肢園に行くことになった。赴任して気づいたのが、ここは福祉施設。福祉がウェルフェア (Welfare) だと言葉ではわかっているけど、福祉の本質は何だろうと、広辞苑で調べた。御存知の通り、「福」も「祉」も共に「幸い」だと。これから私が提供する内容は、幸せの二乗の価値が必要だということで、大変なことだと思った。私は、その頃では単なる医師だったので、医療という形で毎週回診をやっていた。毎回子どもたちの様子を見ていて、何かおかしいと感じていた。入所児は子どもらしくないな、と思った。回診の時に、私の前では静か良い顔をする。これがおかしいな、世間をわきまえて大人みたいな子どもだな、と思った。ずっと、そのことを考えていて、分かった。施設職員は、親とは違うのだ、と。親は、楽しいことも苦しいことも悲しいことも、子

どもと一緒にになって体験して、長い眼でどんな人間に育てるか考えて動いているわけね。職員は、みんな勤務時間が決まっただけで八時間勤務、その間に子どもには、色々なトラブルなく過ごさせようとする。苦しさ、悲しさも感じさせない方がいい。怪我でもされたら問題になる。自分たちに責任が出てくるからね。これが子どもが育つには問題ではないか、大人になって恋が出来るかと思いつ、何か方法を考えないと、と思った。この子らにとって、この福祉施設の環境で小学一年から中学三年までの間過ごすことが本当に幸せか？と思って、駄目だ、幸せではない、この制度を廃止しようと思った。子ども自身が、幸せじゃないから。親はその間手がかからないから、少しは幸せかもしれないけど。しかし、何よりもその子たちの眼が生き活きてないというか、生きてるけど、目は輝いていない。結局、当時五〇人入所していた子どもを、全員を出すのに約三年かかった。

齋藤 それでも、だいたい三年で全員、それぞれどこかにつながったんですね。

笠原 今では、色々言えるけど、子どもたちの一番の幸せは、当時でも地元で家族と一緒に生きることだろうと思ってるね。施設から皆が出てから三年後に、各人本当に幸せになっているのかということを知りたくて、全員再

び集まってもらった。その時は、それぞれが退所後自分は今どうしていると競って話して、うるさいの何のって(笑)。でも、その姿を見て、子どもたちに生きるエネルギーが出て来たなと思って、やっぱり施設から出したのは間違いないなと自信になった。これが私の施設解体の原点。

子どもたちを施設から出した後に、糸賀一雄氏の本の中に書いている「四六時中勤務」という言葉を思い出した。施設で子どもを預かっている間は、親の代わりに複数の職員が交代で子どもたちをみる。しかし、子どもを家に帰した途端、親は二人、又は一人で四六時中勤務せねばならない状況になって、これは大変なことをしてしまっただと思つた。でも、施設から退所して、三年後に戻った子どもたちの姿見た時に、こんなにも生き活きている。ある子は、下肢が変形してしまつて歩くことが不可能なのに、近所のおっちゃんやが地元の会社の社長にかけあつてくれて、就職できるようになったと主張した。とても嬉しそうな様子で、私に訴えてきた。その時、これこそ地元の力なのだろう、家族がいる、近所のおっちゃんもいるようなところで、福祉は支えていかなければならないと考えましたね。

子どもたちにより豊かな環境を、

内容は本場ラーメン…

齋藤 小児保健医療センターの立ち上げにも携わられたということで、その辺りのお話をお聞かせください。

笠原 整肢園時代から、県は将来的に子ども病院の創設の意があった。今度は、預かる場所じゃなくて、障害を最低限へ改善するために治療する場所ということで、子ども病院が必要という認識であった。私はその時、福祉として、同時に、医療での治療の間にも、子どもは育たなければならぬと思った。その様な病院は、日本の何処かにあるのかと思って、既存の五、六つの子ども病院を視察しに行った。しかし、残念ながらも私が思い描くような、医療と子どもの成長を目指すものは発見出来なかった。そこでまずは、見た目から怖いと感じる病院より、そこが楽しそうな建物の外観が必要と考えた。私の頭には「ノイシュヴァンシュタイン城」が思い浮かんで、建築の担当者にそれを伝えたものの、誰もわかってもらえなかった（笑）。次善の策に「ディズニールランドのあの城」でいいと伝えた。齋藤 そうですね。それは、確かに見たことありますね。笠原 それでも、担当者からは「難しいですね」と（笑）。子どもが一般的な威風堂々の姿の病院に連れてこられた

ら、これから何が起ころのだろうと怖い思いを思うところから、外観はお城のイメージに決めた。次に、待ち時間のことも考えた。大抵の病院では、自分の番が来るまでじつと座って待つ。でも、子どもには遊び待ちが最も良いと考え、待ち合いのロビーは、広く動き回れる空間で、遊びながら待てるような状況を作った。またもう一つ、ロビーが明るく豊かだと、高級ホテルで感じるのと同じように、子どもがこの病院に入院するとなった時も、親があまり心配しない。もう一つ、提供する医療内容については、開設時一緒に働く医師たちに言ったのは「これからは、本場ラーメンでいくからな」だった。

齋藤 本場ラーメンですか？

笠原 本場ラーメン!?それを聞いてみんな戸惑っていたけど、本根は、苦痛の中の子どもの治療をしようとする時に、それこそが本物であり、世の中で最高のものでないといかない、という意味。これが本物の医療だろうと思われたら、親は子どもを連れて国内津々から集まってくれる、と信じました。その程度自信のあるものをやらないのだったら、わざわざ子ども病院と名乗ることは不必要だ、というような形ですね。同時に、子どもたちにはそこでの育ちが楽しくて豊かになるような建物、遊びの場にしないと駄目だと考えた。心を育てる一つとして、病院内でのクラシックコンサート

トを行った。お母様方が子どもを入院させている時に、市中のコンサートでも行こうかと、そんな心境にはならない。だから、お母様方も心穏やかな心境にしたい、ということから始めた。病院に広いロビーを作ったので、そこに寄贈してもらったスタインウェイ①のピアノを置いた。それで、色んなプロの演奏者の方に来てもらい、スタッフとも力を合わせて、五八回もの手作りのコンサートを私の時代に実現した。

齋藤 五八回もやられたんですか。それはすごいですね。

笠原 初期の頃、NHK大阪の生放送のニュース中継でインタビューされた時に答えたのは、この本物の響きがずつと治療を受けながら過ごしている彼らの心の底の無意識の場所に貯まってくると良いと思っっている、ということ。それこそ、子どもの心が豊かになるには必要だと思ったから、治療と同時に、本当に子どもたちに育ってもらうのに、絵画、読書など必要なものは何なのかと、常に考えていた。

その他にも、病院外の広場で夏祭りをやろうと考え、実行した。この病院が守山市にあるというのは間違いない事実だから、市長と一緒に夏祭りをやりたいと話したら、市長は即、是非と応じてくれた。祭りには、病院内、市内から親子連れが集った。江州音頭を踊りながら、私がふと見ると、気管切開を受けていて喋れない子どもも参加して

くれていた。そのお母さんが、看護師さんと一緒にその子を広場に連れて出てきた。他の子どもが広場を走り回っていて、自分の子どもは寝たままという時に、私の心配を払うように、お母さんから「先生、子どもがあんな顔して喜んだのは見たことがなかった」と言われてね。それこそ、涙が出るほど嬉しかった。子どもの喜怒哀楽を育てること、一生懸命だったように思うね。

プロとは本来こうあるべきだ

齋藤 お話を伺っていると、お父様が医師として活動されていたことと、つながっている感じがしますね。人を大事にしているような。

笠原 私が医師としてこうやってこれたのは、人、特に子どもが、好きだったのかな。それで、医療と同時に育てをやるとしたら、やっぱり自分が持っているものを全て出すというか、更にもう少し高い所を狙うということでしたね。例えば、最初に診た時に、この子は将来歩くのは無理かと思いき、変形している足の手術は止めた。その後、四歳くらいになり、何と立つことを始めた。これでは、手術をして足を歩ける形にしなければと考え、お母さんから了解もらって手術をすることになった。既に成長した足で、

難しい手術となった。他の例では、四歳くらいのダウン症の子どもが、頸椎が亜脱臼を起こして、手足に麻痺出てくる。呼吸にも問題が出てくるリスクがあった。時に発症することである。でも、この子にとってはこの時期にやるしかない手術だった。大豆くらいの大ささの場所で、私の命が短くなるような難しい手術だったが、無事に目的通りに終わった。翌日、その子が目を覚ました頃に集中治療室へ行ったら、ぱっとこっちを見上げて「ありがとう」と言葉が出た。自分の声で喋ったのか!?と驚いた。それまでの私の診療でも泣くのが主という感じで、私のことを怖がっていると思っていた。でも、その言葉を聞いて、それだけ今まで日々苦しかったのだらうなと思ったね。本当に私の技術で手術が出来て良かった、色々修行した甲斐があったと思っただけ出来事でした。

齋藤 なるほど。それは、すごいご経験ですね。

笠原 他面、プロというのは、私の場合医療だけど、様々な難しいことが目の前で起こる。教科書に書いてあるようなことが、必ずしもその場で展開するわけではない。そんな時に、咄嗟に色んな手を打つ必要が出てくる。プロの意義に気付いた例で、前述の院内のコンサートの話で、ウイー

ンから有名なフルーティストを呼んでコンサートをしたこと思い出すね。あまりに有名な方で、いきなり病院に迎えたら院内が人で溢れて大変なことになるから、その前日に近くの守山市民ホールで有料の演奏会を開催した。その翌日に院内のホールでやれば、分散して大丈夫だと考えてね。その二日間で、プロの技を知らされた。前日の公式な演奏会では、私が主宰者だから、演奏を気にしながら聴いていると、驚いたことに、少し物足りなさを感じた。本当は、私の耳も大したことはないんだけどね(笑)。それで、一曲終わって直に楽屋に走ると、そのフルーティストが室温が高すぎることをめっちゃめっちゃ怒っていた。どうなるかなと思っていたけど、二曲目を席に戻って聴くと、最初の音と全く違う素晴らしい音色だった。その後は、大拍手の連続だった。それで、次の日は病院のホールで、前日と同じピアノが、ナーバスになって調律師に色々注文を出していた。その時、そのフルーティストが、今日はこのホールに合うように私が弾くから心配ないと言って治めた。前日は、有料でお客さんを集めて、音響も素晴らしいホールでプロとしてやっていて、失礼な音楽を聴かせてはいけない。だから、ホールの温度のことでも本気で怒っていた人が、

① スタインウェイ…アメリカ・ドイツに生産拠点を置く、世界的に有名な高級なピアノメーカー。

次の日はその場に合わせて音が出せるから大丈夫と言っていたのね。プロというのは、どんな状況だろうと言いつはしないということだと。その場でそれなりに聴衆に満足してもらえるように、技量でもっていかないといけないということに私は気づいたね。我々は、やはり手術道具などを気にする。プロは、腕に技術を持って言い訳はしない、いつでもどこでも腕を見せられるのだと思った。

### 何をもって障害だとするのか

齋藤 今後のことについて、お聞かせください。

笠原 私も今、アールブリュットを担当しているよね。障害者の芸術作品を最初に見たのは、病院時代で京都市美術館だった。通常の手術を終えて、美術館に走ってびっくりした。色使いといい、彫刻といい、作者の主張が強烈に私の眼に心に、迫ってきた。同時に、私は小学校時代に、こんな色使いをしていた様に思い出した。その頃は、先生からは酷評だった。それを、次第に忘れていた。障害者と言われている彼らが、深い心の底から出てきたものを描いて、造ってそれが今ここに飾られる。それを見た時に、こんなもの障害の有無ではないと思った。だから、糸賀一雄さんたちが、あの時代に研究して、その子の持ち味を引き出し

て育てているのは、本当に凄いと感じた。アールブリュットのような作品を、今の私に作れと言われたら、それはできない。その視点からみれば、私の方が障害を持っているよね。

齋藤 なるほど。そのことが、一般社会で求められるのだとしたら、ということですね。

笠原 そうそう。彼らの就労においても、あれが出来るか、これもやれと言われたら、それに合わない人は、当然バニックになると思う。だから、人々が、社会の仕組みに合わないから障害者と呼ぶのは、本当はおかしいと思いますね。それを糸賀一雄さんたちは乗り越えて、みんなに自らの力を出せるよう、手を差し伸べたのは立派なことだと思えます。医療にもそういうことが言えるのかな、とね。医療は、目の前の患者さんの苦痛を何とかして救ってあげないといけない。そこで、個人個人に、どれだけのプロの力を出すことができるか、というのが医療の責務だと思ってやっています。

齋藤 なるほど。今日は、色々なお話をお聞かせいただきありがとうございます。